

無抵抗が最も暗い闇の中で生み出した誇り—『人間失格』を読んで

書き始める前、この題材でよいのかかなり迷った。『人間失格』は古典で人気作品でもあり、映画や動画にもなっている。鑑賞し分析する文学愛好者も多いのでプラスもマイナスも意見が出揃っており、新しい見識や考えは書こうにもなかなか出て来ない。また、この作品ににじむ消極性と悲観性には強烈な圧迫感があり、感想文を書き始めにくい上ありきたりになりやすい。

しかし日本の文学と言うと脳裏にまず浮かぶのはこの本だ。半自叙伝の形式の表現は平凡な人のいい加減な一生を描きながら、実際には時代の特徴を誇張していると思う。常人の認知の部分を超えることなく、十分に深くて質朴なので、作文の題材には難しいが十分に向いているのだ。

感想文の題名にした「無抵抗が最も暗い闇の中で生み出した誇り」は『人間失格』中の引用句だ。「神に問う。信頼は罪なりや。」という問いのためだ。この一見したところ突拍子もない問いが主人公と作者の一生を悩ませており、私には優れた要約に見える。

作品は長いものではないので一日でさらっと読み終わった。あとがきの最後でバアのマダムが「私たちの知っている葉ちゃんは、とても素直で、よく気がきいて、あれでお酒さえ飲まなければ、いいえ、飲んでも、……神様みたいないい子でした」と言っているのには決して反対はしない。

とても矛盾している考えだ。全文を見渡すと、葉蔵という人物は小さいときから道化を演じることに慣れていて、少し成長した後は酒色に耽り、また心中を図るも、それからまた女性に頼って生活するようになり、薬物に浸って、最後には故郷の兄弟によって精神病院に閉じ込められている。世間の人の目に映る彼は最初から終わりまで無頼な人物だが、他の人の書評を参考にしていると、多くの読者がやはり私と同じようにこの人物に一定の同情を抱いていることに気づく。

原因は思うに、この人物は作家の精神の具体的なイメージであり、読者には太宰治の苦痛に満ちた敏感な一生のほうが見えるからだ。作者が分析した自分の一生であり、葉蔵というキャラクターを作り出し、こうしたキャラクターが人に見せるのは行為の下流さではなく人格の真実であり、社会に溶け込めない社会の底辺にいる者が世間で浮き沈みするあがきであり、多くの人の内心の共鳴なのだ。

こうしたキャラクターから作者の意識が注ぎ込まれる体験はできないが、読者は感情移入して自分から葉蔵の物語を知ってしまう。作者はキャラクターを作る上での誇張により、恐れ入ってびくびくし、過度に他人に迎合して歓心を買う人物を見せている。同時にまた絶えず現世の成り行きに従って、抗争することができずいかなる抗争もする勇気がない人物でもある。

ここでいう「感情移入」は、誰もが人と人の社会の中で生きているので、共通性は必然的に存在し、個性も必然的に存在するということだと思う。共通性と個性が衝突するときは、道理を譲歩することを選ぶほかないため、とぼけて他人の歓心を買うことは避けられず、変えられない物事が現れるのを免れることもできず、成り行きに流されるのも避けられず、結果としてなすすべもなく結果を受け入れるしかない。

転用すると、誰の心の中にも「葉蔵」がいる。

そして「感情移入」の裏側が「意識が注ぎ込まれる」感覚なのだ。作者は主体的に何らかの意識を注ぎ込もうとしているのではなく、作品は作者の心理状態の反映にすぎないのだと思う。彼がこのように思うから、作品はこのように見えるのだ。そのため、作品には必ずしも積極的なあるいは消極的な意味があるのではなく、言わば「読者が千人いればハムレットも千人いる」。一人ひとりの注目するところは異なり、経験した人生も異なるので、自ずと理解も相応に異なるのだ。

作中人物の物語は傍観者の鏡でもある。理解と感想そのものが、人それぞれ見解を異にするものだ。

以上が小説そのものに対する理解で、以下は自ずと作品の延長線上にある物事の観察である。

まず目に入るのが作者だ。この作品を読む前に太宰治の一生をある程度は聞いていたため、読む前に狂人のうわ言を見物する準備をしていた。しかし消極性と退廃に対する準備しかしておらず、作者が多かれ少なかれ人生と理想への執着とあこがれを漏らすのが意外だった。私の観点を実証する箇所は第三の手記の最後の数行に見つかった。「ただ、一さいは過ぎて行きます。自分がいままで阿鼻叫喚で生きて来た所謂「人間」の世界に於いて、たった一つ、真理らしく思われたのは、それだけでした。ただ、一さいは過ぎて行きます。」

「ただ、一さいは過ぎて行きます」が二回繰り返されることで明らかに強調されている。この箇所を読んで少し見方を改めた。生まれつき悲観的な人もいるというだけで、未来にあこがれない人はいない。私が見たのは退廃的な中年ではなく、真実でまた希望に満ちた少年だった。ただ一生の経歴のせいで彼は感動を表現できなかったのだ。

そして見えたのは民族と時代だ。国際問題を投げ捨てると、近代日本は急な起伏を経験し、変革を通じて、古い秩序、旧体制が入り混じって地域の覇者になったと言える。しかし国内の問題はまだ緩和しておらず、歴史的な戦争にすべての国運を賭けて負けた。太宰治はその時代に生まれ、国が山頂に向かいまた落ち込むのを見て、共産主義運動に参加したことがある彼はずっと時代と相容れなかった。しかる後、太宰治と時代の産物に関して、「無頼派」を語ることになる。

周知のように、無頼派は厳格な意味の上の流派ではなく、後代の人の特徴によって数名の作家につけた分類である。換言すれば、当時の人は秩序の混乱、価値観の崩壊に対して暗く退廃的な態度をとっていた。魏晋文学も同様にこのような風格を持つので連想に難く

ない。最終的な結果も同じだ。冗談と投げやりの間を行き来して人間性の解放を求めている。この本を通じて当時の日本国民の心理状態を多少は分かった。

それ以外に取り上げる価値があるのは昭和の文豪に自殺が多くあったことで、芥川龍之介、川端康成、三島由紀夫など枚挙にいとまがない。原因の一端は日本人固有の「もののあはれ」の文化の文脈で、桜のように生き、きらきらと美しい時期に散るのはとても美学の趣きがある。もう一つの側面は歴史で、激しく揺れ動く社会の変化は事実、受け入れにくい。こうした文章の風格があることも容易に理解できる。

最後は共鳴と不一致だ。今日の私達はそのような社会の中で生まれてはいない。しかし太宰治の作品に対して同情と感慨を生むことはできる。恐らくそれは、今の時代も常に自己を抑えなければならず、本当に上文のとおり、現代人の心の中にはすべて気弱な自分があるのかもしれない。

しかし本当に太宰治と同じように鬱憤がたまることはめったにない。結局は時代が異なり、人が夭折したがることはめったになく、誰もがある程度の成功をしたいと思っている。悲観的なことに自信を持って誰にも明確な答えはなく、物語はしょせん他人の話、もう十分だと悟り、「最も暗い闇」の必要は全くなく、まじめに生活さえすればよいのだ。